高学年児童の自己有用感を育む
「たてわり活動ハンドブック」の作成と活用

―― 一人一人が活躍し、他者から認められる
異年齢交流活動の工夫を取り入れて――

長期研修員　　大芦　純

《研究の概要》

本研究は、「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」の作成と活用を通して、教師の共通理解を図り、高学年児童が見通しを持って活動に取り組み、児童主体の異年齢交流活動になるように工夫することで、高学年児童の自己有用感を育むことを目指した実践研究である。まず、児童会本部による取組や輪番制によるリーダー体験、下級生のために行動するという高学年児童一人一人が活躍する場を設定し、役割を任せることで、児童が主体的にたてわり活動に取り組めるように工夫した。さらに、活動ごとに、下級生や仲間、保護者、教師からの肯定的な評価を得るためのワークシートの作成と活用により、他者から認められる経験を重ねることで、高学年児童の自己有用感を育むことを明らかにした。

キーワード　**【自己有用感　異年齢交流活動　輪番制　児童主体　生徒指導】**

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｆ０８－０１　平成２７年度　２５５集

Ⅰ　主題設定の理由

文部科学省は、「いじめの防止等のための基本的な方針」（2013）で、「全ての児童生徒が安心でき、自己有用感や充実感を感じられる学校生活づくりも未然防止の観点から重要である」としている。

平成27年度の群馬県学校教育の指針解説編には、「いじめの未然防止に向けた人間関係づくりを進める取組の充実」において「自己有用感をはぐくむ教育活動の充実」が求められている。ここでの「自己有用感」とは、「相手からの好意的な反応や評価があって感じることのできる自己の有用性のこと」とある。また、自己有用感を育てていくためには、「授業や集団活動をとおして、『ほめる』『励ます』『認める』などの肯定的な評価を積極的に行う」ことや「『異年齢交流』がより有効」とある。

協力校のこれまでの異年齢交流活動（たてわり活動）においては、全校４団編制（各団５班編制）で、月に１回程度の活動のため、児童同士のつながりが表面的で、居場所づくりをすることまでには至らなかった。また、たてわり遊びや団活動では、６年生の班長や役員になった一部の児童が休み時間に計画し、準備する時間もなく、負担が多いことが課題であった。さらに、異年齢交流活動のために環境を整えることや組織で取り組むこと、教師主導になってしまう班は児童の主体的な活動が十分に行われないことなども課題であった。その課題を解決するために、異年齢交流活動におけるねらいや支援について教師の共通理解を図り、高学年児童一人一人に活躍する場を設定し、児童主体の異年齢交流活動になるように工夫する。そして、高学年児童が主体的に班の仲間や下級生に関わり、下級生のために行動することや、主体的な活動を他者から認められることが、高学年児童の自己有用感を育む異年齢交流活動になると考える。

そこで、児童主体の異年齢交流活動の取り組み方をまとめた「教師用たてわり活動ハンドブック」の作成と活用を通して、高学年児童に対する肯定的な評価の充実及び教師の共通理解を図る。また、高学年児童が活動の見通しを持ち、主体的な活動を成功体験に導くために、高学年児童が活動から感じた課題解決策をまとめた「児童用たてわり活動ハンドブック」を作成し、活用する。その中で、高学年児童が活動において仲間と協力し、児童主体の多様な活動に取り組むことで絆づくりをしながら、仲間や下級生と活動する楽しさや喜びを感じ、上級生としての役割を成し遂げる体験を重ねる。そして、一人一人が自分の行動に対して他者からの肯定的な評価により自己有用感を育むことができれば、他者をいじめるという気持ちにもならず、他者との関わり方をよりよくしようと考え、いじめの未然防止にもつながるであろうと考える。

以上のことから、本研究では、高学年児童の自己有用感が育まれた姿を、主体的に活動し、他者からの肯定的な評価により、仲間と協力して、他者のために行動する児童と捉え、高学年児童の自己有用感を育む異年齢交流活動の工夫と改善に取り組む。そして、「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」の作成と活用によって、高学年児童が異年齢交流活動において、他者との関わりを楽しみながら、他者のために行動し、他者から認められる経験を重ねることが、高学年児童の自己有用感を育むことになるであろうと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

一人一人が活躍し、他者から「ほめる・認める・励ます」メッセージにより認められる異年齢交流活動の工夫を取り入れた「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」を作成し、活用することが、高学年児童の自己有用感を育むために有効であることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　「たてわり活動ハンドブック」とは

「たてわり活動ハンドブック」として、教師用と児童用を作成する。教師用は、活動のねらいや手立てをリーフレットにまとめたり、多様な交流活動の流れを示したりするもので、高学年児童の

自己有用感を育む児童主体の異年齢交流活動にするために、教師の共通理解を図るものである。活用としては、職員会議で異年齢交流活動のねらいや流れを検討し、共通理解を図る。年間を通して多様な活動に取り組むため、活動前にはその都度、活動の流れや教師の支援の仕方について確認する。

また、児童用は、高学年児童の役割の説明や下級生との接し方のポイントなど、児童が活動から感じた課題解決策をまとめる。高学年児童が、児童用ハンドブックを事前学習で読み、活動への見通しを持つことで、上級生としての役割を成し遂げるという成功体験へ導く手立てとするとともに、異年齢交流活動を次年度へ継続させるための参考資料とする。なお、児童用ハンドブックは、委員会の時間に、児童会本部が中心となって高学年児童の意見を集約し、児童の思いを生かして作成する。

図１　研究構想図

(2)　「一人一人が活躍する異年齢交流活動の工夫」について

①　「異年齢交流活動の工夫」とは

本研究における異年齢交流活動の工夫とは、児童主体の異年齢交流活動にするための工夫と、高学年児童が活動ごとに他者から肯定的な評価を受け取るための手立てを工夫することである。まず、高学年児童が主体的に活動する場を設定し、児童の考えや発想を生かした活動にする。高学年児童が主体的に活動を進めるためには、仲間や下級生との関わりにおいて具体的なめあてを持って活動し、教師の助言・援助は端的かつ的確であることが大切だと考える。そこでの教師の役割は、年間の活動内容や時間、班編制など基本的な枠組みを定め、班ごとのたてわり活動の進め方に差がないように共通理解を図り、進行は高学年児童に任せ、支援することである。また、高学年児童の自己有用感を育むには、児童主体の異年齢交流活動において、他者から認められ、肯定的な評価を受け取ることが必要であるため、ワークシートの工夫にも取り組む。

このように、異年齢交流活動の工夫とは、高学年児童の自己有用感を育むために、児童主体の活動と他者からの肯定的な評価を受け取るワークシートについて工夫することである。

②　「一人一人が活躍する」とは

本研究における一人一人が活躍するとは、異年齢交流活動において、高学年児童一人一人が上級生としての役割を持ち、その役割を成し遂げるということである。そのために、三つの工夫に取り組む。一つ目は、児童会本部の取組として、たてわり活動の環境を整えることである。学年のめあてや活動計画を考え、高学年児童へ伝えたり、高学年児童が肯定的なメッセージを受け取るためのワークシートや活動記録を掲示するコーナーを作成したりする。二つ目は、５年生が活動ごとに同じ班の２～４年生とペアになり、ペアになった下級生が活動を楽しんだり、協力して活動したりできるように、下級生のために行動することである。三つ目は、６年生が同じ班の１年生とペアになり、年間を通して同じ児童に関わりながら、全員が輪番制によるリーダー体験をすることである。

リーダー、サブリーダー、記録係を順番に経験し、リーダー役の仲間に協力したり、サポートしたりすることで、仲間のために行動することにもつなげられると考える。

このように、高学年児童は、役割を持つことで下級生と一緒に活動を楽しみ、班の同学年の仲間と共同的な活動を通して絆づくりをしながら、上級生としての役割を果たし、主体的に活動に取り組むことができると考える。一人一人が活躍するとは、役割を任せたり、輪番制にしたりすることで、全員が活躍する場が設定され、高学年児童が主体的に活動に取り組むことである。

③　「他者から認められる」とは

本研究における他者から認められるとは、高学年児童が、個人の振り返りカードである「Good Jobカード」や６年生が作成する掲示用カード「たてわりENJOYカード」に、活動後に他者（下級生、班の同学年の仲間、班の担当教員、保護者）から「ほめる・認める・励ます」という肯定的なメッセージを、カードを手立てとして受け取ることである。このことで、高学年児童は、活動ごとに自分の行動に対して、繰り返し他者から認められる経験を重ねることで、自分の役割を成し遂げ、下級生や仲間のために行動できたと感じ、自信を持ち、自己有用感が育まれると考える。

２　実態調査の結果と考察

協力校の高学年児童へのアンケート調査（５月）によると、たてわり活動で「他学年の人と遊んだり、活動したりすることが楽しい」と答えた児童は、５年生が59%、６年生が83%であり、「下級生の役に立っていると思う」（図２）と答えた児童は、５年生が33%、６年生が58%であった。５年生は、６年生と比べると下級生の役に立っているという意識が低いことが分かる。また、「どういう時に、下級生の役に立っていると思うか」（図３）という質問に対しては、「ありがとうと言われたとき」「楽しかったと言われたとき」が多く、「下級生のために行動したとき」は、他の項目に比べて低いという結果であった。これは、前年度のたてわり活動において、４年生や５年生のときには「上級生として下級生のために行動する」という意識がなかったことや、班で集まって活動するときには、同学年同士で集まり、「下級生が楽しめるように一緒に遊ぶ」「下級生のために言葉を掛ける」という取組がなかったからだと考える。

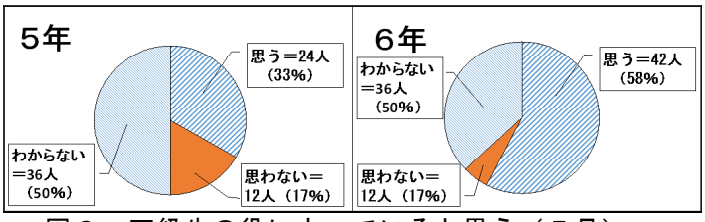

図２　下級生の役に立っていると思う（５月）

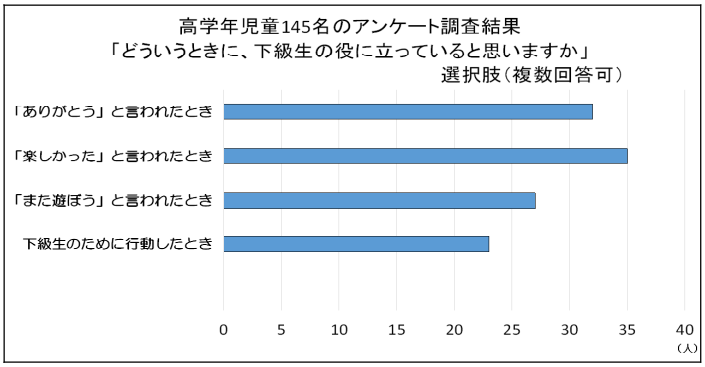

図３　下級生の役に立っていると思うとき（５月）

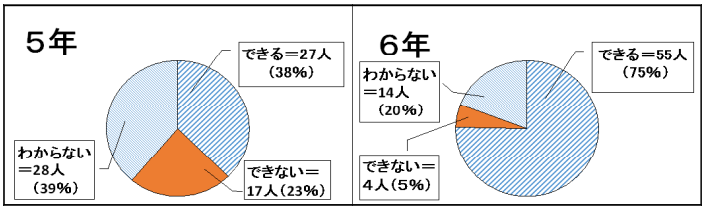

図４　班のリーダーができると思う

また、異年齢交流活動における高学年児童の課題は、「班のリーダーができると思う」という質問に対して「できない・分からない」と答えた児童が、高学年児童の43%いるということである（図４）。その理由は、「リーダーになることに自信がない」「一人でやることが無理」「不安だから」と感じていることが分かった。

そこで、高学年児童一人一人が、輪番制によるリーダー体験や下級生のために行動するという上級生としての役割を持ち、仲間や下級生と活動する楽しさや喜びを感じ、協力しながら活動したり、自分の役割を成し遂げたりする児童主体の異年齢交流活動を実践する。

そのために、「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」の作成と活用により、高学年児童の自己有用感を育むために、一人一人が活躍する異年齢交流活動の工夫や教師の共通理解を図る。さ

らに、高学年児童が活動後に他者からの肯定的な評価を得るためのワークシートである「Good Job カード」や「たてわりENJOYカード」の作成と活用によって、高学年児童の自己有用感を育みたいと考えた。なお、たてわり班ごとの高学年児童の話合いや活動の準備、振り返り、ワークシートの記入などの事前・事後学習は、総合的な学習の時間に行う。

３　教材の概要

(1)　「教師用たてわり活動ハンドブック」の内容

教師用たてわり活動ハンドブックは、異年齢交流活動において、自己有用感を育む児童主体のたてわり活動を導くためのリーフレット（図５）や、たてわり活動における事前・事後学習の流れ、ワークシートの活用例、多様な活動プラン、ワンポイント・アドバイスを入れる。活動の写真や支援のポイントを載せることで、高学年児童の活動内容を視覚的に理解できるようにし、教師の支援においては、高学年児童への言葉掛けや留意点を示す。

また、これから異年齢交流活動に取り組む学校や、すでに取り組んでいる学校など、学校の実態がそれぞれ違うため、参考になるところを選択して活用できるように、活動ごとに活動の流れを１ページでまとめ、活用しやすいものにする。

図５　たてわり活動リーフレットの内容

表１　「教師用たてわり活動ハンドブック」の構成

活用場面		ページ	内　容
準備	職員会議	1 ～4	・「たてわり活動リーフレット」 （たてわり活動のねらいと支援のポイント）
委員会活動	児童会本部 ・学年のめあてや活動内容を考える ・児童用たてわり活動ハンドブックの作成 ・活動の振り返り	 6 7 8 9	【第１章　児童 が中心となって考える異年齢交流活動】 ＜委員会活動（児童会本部）の流れ＞ ・「たてわり活動計画を考えよう」 ・「活動計画・振り返りカード」と「たてわりコーナー」 ・「児童用たてわり活動ハンドブックを作成しよう」 ・「たてわり活動を振り返ろう」
総合的な学習の時間	授業 ・事前学習 ・事後学習	 11 17	【第２章　児童主体の異年齢交流活動の進め方】 ＜児童主体のたてわり活動の流れ＞ ・「たてわり遊びオリエンテーション」５、６年 ・「たてわり活動の振り返り」
朝行事・学校行事 児童会活動・清掃	たてわり活動 ・たてわり遊び ・たてわり清掃 ・運動会（団活動） ・たてわり長縄 ・ENJOYファイルの引き継ぎ	 13 14 15 16 18	 ・「児童主体のたてわり遊び」 ・「児童主体のたてわり清掃」 ・「運動会における異年齢交流活動」 ・「５年生（新６年生）のリーダー体験」 ・「６年生から５年生へ‘たてわり活動を引き継ごう’」

(2)　「児童用たてわり活動ハンドブック」の内容

児童用たてわり活動ハンドブックは、委員会活動の時間において、児童会本部が中心となり、高学年児童の意見やイラストを集約し、たてわり活動における上級生としての役割の説明や下級生との関わり方、活動のポイントをまとめたものである。

作成のねらいは、高学年児童が自分の役割に対して見通しを持ち、主体的に活動し、上級生としての役割を成し遂げるという成功体験へと導けるもの、次年度へ活動を継続するための参考になるものを作ることである。内容については、高学年児童の活動における課題解決策を示し、児童主体の活動であるため、児童の思いを生かして作成する（図６）。

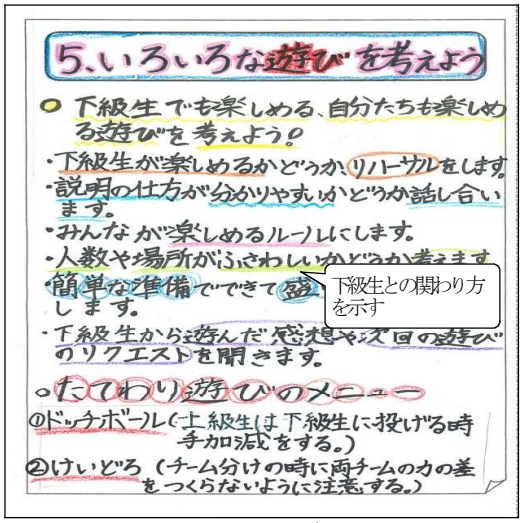

図６　児童用ハンドブックの内容

表２　「児童用たてわり活動ハンドブック」の構成

活用場面		ページ	内　容
総合的な学習の時間	事前・事後学習	1	・はじめに
		2	・もくじ
		3	・５年生の役割は？
		4	・６年生として…
		5	・６年生の係の仕事
		6	・班のメンバーと話し合うときのポイント
		7	・いろいろな遊びを考えよう
		8	・下級生への話し方のポイント
		9	・下級生への接し方のポイント
			・こんな時、どうする？
		10	①下級生が遊びの内容が分からないとき
		11	②つまらなそうにしているとき
		～13	③けんかが始まったとき
		14	④おしゃべりをしていて、話を聞いてくれないとき
		15	⑤「ありがとう」「楽しかった」と言われたとき

(3)　自己有用感を育むためのワークシートの作成と活用について

①　個人の活動記録集である「Good Jobカード」とは

本研究において「Good Jobカード」とは、高学年児童一人一人が、活動ごとに自分の役割におけるめあてや活動計画、実践における振り返りの感想までを１枚のカードに記録し、そこに他者（ペアで関わる下級生、班の同学年の児童、保護者）から肯定的なメッセージを受け取り、個人の活動記録集とするカードである（図７）。

高学年児童は、下級生のために行動したり、上級生としての役割を成し遂げたりするという活動に対して、他者から「ほめる・認める・励ます」などの肯定的な評価を繰り返し受け取ることで、カードが増える度に達成感や自信を持つことができ、他者と関わる楽しさや、他者のために行動する喜びを感じる経験を重ねることができると考える。

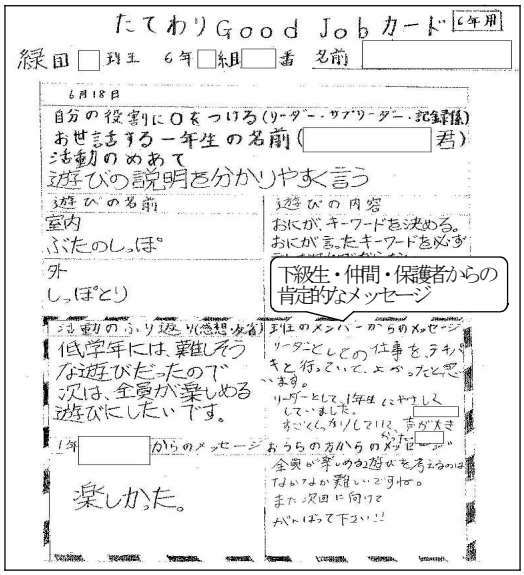

図７　Good Jobカード

このように、「Good Jobカード」とは、たてわり活動における仲間との共同的な活動において、高学年児童が他者から認められることや、互いに肯定的なメッセージを書き合うことで、仲間との絆づくりにもつながり、たてわり活動の取組や児童の活動の様子を家庭に伝えるカードにもなると考える。

② ６年生が班ごとに作成する「たてわりENJOYカード」とは

「たてわりENJOYカード」とは、活動ごとに各班で、６年生が、輪番制で計画から実践、振り返りまでの一連の流れを１枚のカードに記入し、活動後に担当教員から肯定的な評価を受け取るカードである（図８）。なお、児童会本部が、全校児童が確認できる場所にたてわりコーナーを設置し、６年生は、班ごとに作成したカードを掲示する。

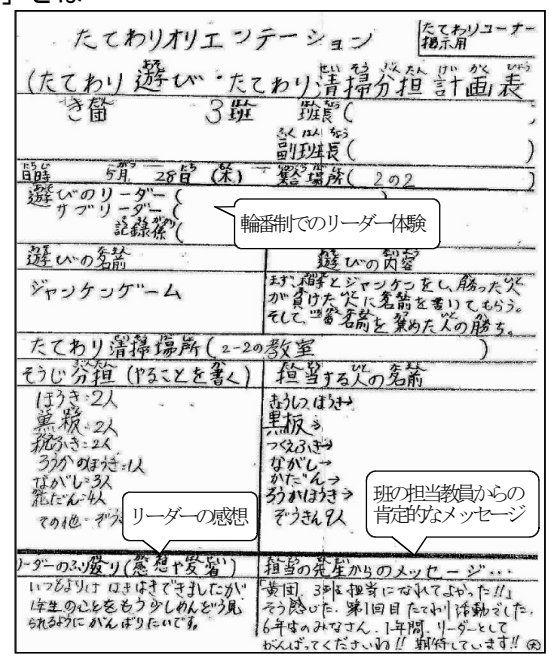

図８ たてわりENJOYカード

このように、「たてわりENJOYカード」は、６年生全員が班の担当教員から、仲間との取組をほめられたり、認められたりしたことを全校児童や保護者に伝えるカードである。そして、６年生の輪番制によるリーダー体験により、仲間との共同的な活動から絆づくりにつなげ、上級生としての役割を成し遂げたという成就感によっても、６年生の自己有用感を育むことができると考える。また、全校児童や教職員が、班ごとの活動内容を知るための手立てにもなり、異年齢交流活動を自分のこととして捉え、班への所属意識を高め、居場所づくりにもつなげられると考える。さらに、年度末にはカードをファイルに綴じ、６年生から５年生へ引き継ぐ活動へとつなげる。

(4) 自己有用感を育むための、児童主体の多様な活動について

個人用の「Good Jobカード」及び６年生が班ごとに作成する「たてわりENJOYカード」は、児童会本部の児童が、教師と共に活動ごとにレイアウトや内容を考えて作成する。

「Good Jobカード」は、学級の教室や廊下にクリア・フォルダー式のポートフォリオにすることで、個人の活動記録集として、いつでも他者からの肯定的なメッセージを読むことができ、互いのよさを知る活動へとつなげる。また、図９のたてわりコーナーには、「たてわりENJOYカード」を掲示し、６年生や下級生が「Good Jobカード」と同様に、いつでも過去の活動内容や担当教員からのメッセージを読めるようにする。

たてわりコーナーの設置は、児童会本部が担当し、委員会活動の時間において、高学年児童からのアイデアを取り入れながら作成する。また、掲示場所は、団ごとに色別（赤、青、黄、緑）で示し、全校児童が班への所属感や仲間意識を感じられるようにする。さらに、たてわり遊びについては、輪番制で活動記録も作成する。これは、全校児童や教職員、来校者や保護者、地域の方に向けて、主体的に異年齢交流活動に取り組む児童の姿を情報発信する場になると考える。

図９ たてわりコーナー（たてわりENJOYカードと活動記録の掲示）

Ⅳ　研究の計画と方法

１　実践の概要

「教師用たてわり活動ハンドブック」を活用し、教師の共通理解を図り、児童主体の異年齢交流活動を月１回程度実践する。活動ごとに事前・事後学習を総合的な学習の時間に位置付け、グループでの話合いや準備、振り返りを行う。児童会本部による取組や輪番制によるリーダー体験、下級生のために行動するという一人一人が活躍する場を設定し、活動ごとに「Good Jobカード」や「たてわりENJOYカード」に他者からの肯定的な評価を受け取り、認められる経験を重ねることで、高学年児童の自己有用感を育む異年齢交流活動を実践する。なお、児童会本部は、委員会活動において、たてわり活動の環境を整え、「児童用たてわり活動ハンドブック」を作成し、高学年児童全員で活用する。

対象	児童会本部（12名） 小学校高学年児童（148名）	期　間	平成27年５月～12月
時間	委員会活動（児童会本部による取組） 総合的な学習の時間（事前・事後学習） 〈単元名「自分を見つめて」キャリア教育〉 児童会活動、朝行事、運動会、清掃時間	指導者	全教職員 長期研修員
活動内容	・児童会本部によるたてわり活動計画及び輪番制でのワークシートの作成（５、６月）、輪番制でのたてわりコーナー作成（活動ごと）、児童用ハンドブックの作成（７月～11月） ・たてわり遊び（５回）５／28、６／18、７／２、10／23、12／３ ・たてわり清掃（１、２学期に１週間ずつ）６／22～26、11／２～６ ・運動会における団活動（運動会練習～当日、解団式）９／１～９／26 、９／29		

２　検証計画

検証の視点	検証の方法
「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」の作成と活用は、教師の共通理解を図り、一人一人が活躍する異年齢交流活動を導くための有効な教材となったか。	・活動の様子の観察・記録 ・教職員への聞き取り ・教職員、児童アンケート調査 ・児童の活動の振り返り（７月、11月） ・ワークシートの記述
一人一人が活躍する異年齢交流活動の工夫や、他者から認められる活動を導くワークシートの活用は、高学年児童の自己有用感を育むための有効な手立てとなったか。	

３　実践

(1)　委員会活動（児童会本部）における「たてわり活動ハンドブック（教師用）」の活用（５月）

この案を基にして行った授業実践

児童主体の活動の様子	ハンドブックを活用した教師の気付き（◇）と 児童に対する肯定的な評価（◎）
○話合いで課題や活動のめあて、役割分担を考える場面 自分の思いを伝え合う様子 「同じ遊びが多かった」「盛り上がらなかったから、遊びを工夫しよう」「下級生も楽しめる遊びを考えよう」 めあてを決める様子 ６年生は、学年のめあてを「協力・責任・思いやり」にしよう。	◇昨年度の課題からの改善案がたくさん出た。児童は、自分たちでたてわり活動をより良くしようと、全員が意見を伝えていた。 ◇５年生は、人数が少ないので教師が見守ったが、６年生は、課題について自分たちで話合いを進めて、意見をまとめていた。 ◇児童だけで話し合い、意見がまとまった。分からないことは、教師に質問して確認していた。一人一人が活動における役割を分担することで責任を伴うため、児童もやる気が出るのだと感じた。 ◇今年度のたてわり活動は、児童主体の新たな取組だが、児童は、見通しが持てると活動内容や役割分担について話合いで決めることができた。児童の考えを引き出し、尊重する大切さが分かった。 ◇できるだけ児童の思いを生かして、主体的に取り組めるように、教師は見守り、活動を児童に任せてみようと思った。 ◎「話合いをして学年のめあてを考えるときに、様々な意見が出ましたね。たてわり活動をより良くしたいという思いが伝わりました。今年度は、みなさんが新しいたてわり活動をつくります。これが伝統になるように、自分の役割を意識して、活動に取り組んでください。高学年児童の代表としての活躍を期待しています」
他者（教師）からの肯定的な評価を受けての、児童の振り返り（自己有用感に係る感想）	
・下級生も、６年生も楽しめるたてわり活動を工夫したいと思います。 ・たてわり遊びは、いつも同じ遊びにならないように、新しい遊びを考えて紹介したいです。 ・役割を分担しながら、児童会全員で協力して取り組みます。 ・高学年の人たちに、学年のめあてや新しい遊びを劇にして紹介したいです。	

(2)　たてわり遊びにおける「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」の活用（12月）

この案を基にして行った実践

<table>
<tr><th>児童主体の活動の様子</th><th>ハンドブックを活用した教師の気付き（◇）と児童に対する肯定的な評価（◎）</th></tr>
<tr><td>
○はじめの言葉（班長）と遊びの説明（リーダー）

これから○班のたてわり遊びを始めます。
今日は震源地をやります。ルールは…。説明を聞いて、やり方がわかりましたか。
○高学年がリードして、下級生と一緒に遊ぶ。
ぶたのしっぽ

震源地

ドッジボール

サバイバルドッジボール

○振り返り（感想の発表）と教師からの賞賛
感想の発表

教師からの賞賛

今日の遊びの感想を、５年生から発表してください。
「ほめる・認める・励ます」メッセージをもらう
※５年生は、下級生から「Good Jobカード」にメッセージを書いてもらう。６年生は、聞いたメッセージをカードに記入する。(活動後)
</td><td>
◇事前学習と「ENJOYカード」により、子どもたちは混乱せずに、時間通りに集合場所に移動できた。
◇遊びの説明では、リーダー役の児童の言葉が足りないときは、他の６年生が説明を付け足し、リーダーをフォローしていた。
◇リーダーを中心に、６年生は下級生のために言葉を掛けたり、気遣ったりしていた。自分から進んで下級生に声を掛ける高学年児童が多かったが、ペアになった下級生から離れたところにいた５年生がいたので、ハンドブックを参考にして、下級生の隣に移動するように助言した。
◇室内よりも校庭で活動する方が、６年生は、下級生に集中して話を聞いてもらうことが大変だったので、必要に応じて６年生を支援した。
◇リーダー体験は初めてという６年生がいた。課題があった場合は、励ましの言葉をかけた。
◇６年生は、全員がリーダーを経験できるので、リーダーの大変さが分かり、互いにアドバイスし合うなど、協力する姿が見られた。
◎「６年生が上手に進行してくれましたね。５年生も下級生に言葉を掛けてくれてありがとう。」
◇高学年児童は、下級生や班の仲間からメッセージをもらうことで、活動のめあてに対して、客観的に自己の活動を振り返ることができた。
</td></tr>
<tr><td colspan="2">担当教員からの肯定的なメッセージ（「たてわりENJOYカード」より）</td></tr>
<tr><td colspan="2">・６年生を頼りにしている下級生がたくさんいます。次回も５、６年生の行動を期待しています。
・下級生のために言葉を掛けながら進行できたところは、６年生としてよかったです。
・６年生のリーダーシップがよく発揮されていました。次も協力して班を引っ張ってください。</td></tr>
<tr><td colspan="2">「活動のめあて」に対する児童の振り返り（「Good Jobカード」より）</td></tr>
<tr><td colspan="2">・今までは、下級生と話さなかったけれど、自分から積極的に話しかけることができた。（５年）
・２、３年生の面倒をできるだけ見た。上級生も、同級生も、下級生も、みんなと仲良く活動することができて、担当ではない下級生にも遊びのルールを説明できた。（５年）
・自分が場を盛り上げ、困っている下級生をサポートできたのでよかった。（６年）
・班長がいないときは、自分が班長だと思って行動した。（６年）</td></tr>
</table>

Ⅴ　研究の結果と考察

１　「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」の有効性について～教職員の聞き取り調査（５月～10月）及び11月のアンケート調査（教職員、児童会本部）の結果から～

「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」は、児童主体の多様な活動について、活動ごとに１ページで流れをまとめた。教職員からは、活用した感想として「見やすかった」「分かりやすい」「活動の進め方が分かった」という感想を得た（図10)。また、教職員へのアンケート調査では、「教師

が引っ張る意識が『子どもに任せてよい』と変わったので役立った。ほめる循環は大事」「教師の台詞が吹き出しになっているので、児童への言葉掛けが分かりやすかった」「目的意識を常に持って学校としての一貫した指導・支援を継続していけると思う」という意見を得た（図11）。また、全20班の班別でのたてわり遊びやたてわり清掃の様子を見ると、どの班も同じ流れで活動しており、教師主導ではなく、児童主体の活動になった。これは、教職員が、たてわり活動前に「教師用たてわり活動ハンドブック」を活用して、活動のねらいや流れを確認し、児童主体の活動にするために、教師の支援や高学年児童への言葉掛けについての共通理解を図ることができたからだと考える。

・活動の流れを見ながら進行を児童に任せたが、６年生だけで活動を進められ、子どもたちは力があると思った。
・児童会の子どもたちが、やる気がある。自分たちで取り組むという意識を持っていた。
・５分前に「振り返りをしましょう」という放送があり、振り返りの大切さを意識した。
・班ごとの活動でも、活動の流れが同じになるので、時間通りに始まり、終わることができた。

図10　教職員の聞き取り調査における意見

・活動前には必ず読んだ。どこまで教師がバックアップするか、言葉掛けをすればよいかが参考になった。
・ハンドブックがあることで、やることが共有できる。
・短時間の活動が、計画的に進められてよいと思う。
・全体で足並みをそろえるためにも、良い指針となっている。
・困ったときに、ハンドブックが手元にあると便利。

図11　教職員へのアンケート調査の記述

さらに、「児童用たてわり活動ハンドブック」については、作成した高学年児童から「自分が作成したものが来年度も使ってもらえるとうれしい」「困っている人にとって、役に立つものになると思う」という感想があった。また、下級生との関わり方をより良くしたい、みんなの役に立つハンドブックにしたいという高学年児童の思いが詰まった内容にすることができた。このような児童会本部の取組の一つである「児童用たてわり活動ハンドブック」の作成では、作成した高学年児童の自己有用感を育むことができた。そして、高学年児童が事前学習でハンドブックを活用した結果、たてわり遊びにおける児童の変容については、ペアで関わる下級生に対して、活用前よりも進んで言葉を掛けて次の動きを教えたり、目線を合わせて話をしたりする姿が見られた。これは、高学年児童が「下級生への話し方や接し方のポイントは？」に記してあることを読み、意識して活動したからだと考える。

このように、「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」の作成と活用は、教師の共通理解を図り、仲間や下級生のために進んで行動する高学年児童の姿が見られたことから、高学年児童一人一人が活躍する異年齢交流活動を導く有効な教材となったと考える。

２　高学年児童の自己有用感を育むための、一人一人が活躍する異年齢交流活動の工夫について

(1)　教職員の聞き取り調査（５月～10月）及びアンケート調査（11月）の結果から

「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」には、児童会本部による取組や輪番制によるリーダー体験、下級生のために行動するという一人一人が活躍する場を設定し、児童主体の多様な活動の流れや教師の支援のポイント、高学年児童の下級生との関わり方のポイントを載せた。

教職員の聞き取り調査から、輪番制によるリーダー体験については、「初めてリーダーになる児童は、友達の活動の様子を見て、見通しを立てていた。友達の行動から学んでいた」「リーダー経験が多い児童は、リーダーをサポートするフォロワーの立場を経験し、仲間のために協力していた」という意見を得た（図12）。一人一人が活躍する場の設定として、リーダーを輪番制にしたが、６年生は、活動の回数を重ねることで、リーダー役の児童をサポートしようと仲間と協力する姿が見られた。リーダーを全員が経験するという輪番制は、６年生全員が活躍することができたという教職員の気付きにつなげられた。また、下級生のために行動することについては、「教師用たてわり活動ハンドブック」の中の「運動会での異年齢交流活動」や「たてわり清掃」を活用した実践後に「６年生の下級生に対するリーダーシップや、仲間と協力する姿

・たてわり遊びや団活動では、６年生は、子どもたちが助け合って進行していた。
・輪番制は、今までリーダー経験のない児童が、リーダーを経験できたのが良い。
・たてわりコーナーを見る児童が増えた。集合場所や活動内容がわかるので、集まりが早くなった。
・高学年全員が下級生とペアで関わることで、人に優しくする経験ができた。
・「下級生のために行動する」は、下級生が上級生になったら自分もお世話する側になるという気持ちになれる。
・上級生が運動会で応援する姿を見て、下級生が真似をして応援していた。よい手本になっていると思った。

図12　教職員の聞き取り調査から

が多く見られた」「たてわり清掃では、高学年児童が主体的に動き、下級生に声を掛けて一緒に机を運んでいた。普段の掃除より、ほめることがたくさんあった」という意見を得た。

さらに、11月の教職員へのアンケート調査からは、一人一人が活躍する場の設定について、「高学年児童が役割を持つことで、児童がやらされているという感じを持たず、自分たちでやっているという思いを強く持てると感じた」という記述を得た（図13）。そして、運動会での実践では、６年生のリーダー性が育ち、たてわり遊びや清掃では、下級生への言葉掛けがよく聞こえるようになるという児童の変容が見られた。しかし、「今年度は６年生が積極的、意欲的に動いてくれたが、次年度も同じように６年生が行動できるかを考えると、そこが課題だと職員間で感想が出ていた」という記述もあった。

・一学期は教師に頼りがちな様子も見られたが、今では自分たちでやろうという意識が感じられる。
・児童会の取組や輪番制は、取り組みやすかったので、児童が意欲的に取り組めたと思う。
・「主体性」をキーワードに、高学年の児童自身がマネジメントしていくこの取組は、画期的だった。
・度々廊下を通りかかった６年生が、１年生が手の届かない所の窓拭きを手伝い「ありがとう」と交流していた。これは、去年は見られない姿だった。

図13　教職員へのアンケート調査の記述

これらのことから、一人一人が活躍する異年齢交流活動の工夫によって、高学年児童は、自分の役割を持つことで、自ら考え判断して、仲間と協力して、他者のために進んで行動することができたと考える。また、児童の姿の変容からは、異年齢交流活動の継続の成果として、高学年児童の活躍により、下級生が上級生に憧れを感じ、下級生も育つことが分かった。そこで、児童主体の異年齢交流活動を次年度へ継続させるためには、高学年児童が下級生の良いモデルになり、５年生のうちにリーダー体験をすることが必要であると考え、「教師用たてわり活動ハンドブック」に「５年生のリーダー体験」実践例を載せた。さらに、児童会本部による取組においては、たてわり活動の環境を整え、学年のめあてや改善点を提案したことが、高学年児童の新しいたてわり活動を自分たちが成功させ、伝統にしたいという主体性を育むことにつながった。

このような結果から、「たてわり活動ハンドブック（教師用＆児童用）」を活用した、一人一人が活躍する異年齢交流活動の工夫は、高学年児童が、仲間と協力して、他者のために進んで行動する姿を導き、高学年児童の自己有用感を育む有効な手立てとなったと考える。

(2)　高学年児童へのアンケート調査及び児童の振り返りの感想（11月）より

11月のアンケート調査では、たてわり活動で「他学年の人と遊んだり、活動したりすることが楽しい」と答えた児童は、５年生が74％であり、５月に比べ15ポイント増え、６年生は変化がなく83％だった。５年生は、一人一人が下級生のために行動するという役割を持って活動したことで「他学年との活動を楽しい」と感じ、数値が上がるという結果になったと考える。また、「どういうときに、下級生の役に立っていると思うか」（図14）という質問に対しては、「下級生のために行動したとき」「楽しかったと言われたとき」の数値が約２倍に増えた。これは、高学年児童が「児童用たてわり活動ハンドブック」を活用して、下級生のために行動するという実践の結果、下級生から「楽しかった」という肯定的なメッセージを「Good Jobカード」に受け取る経験を重ねることで、自分が役に立っていると感じることができたからである。

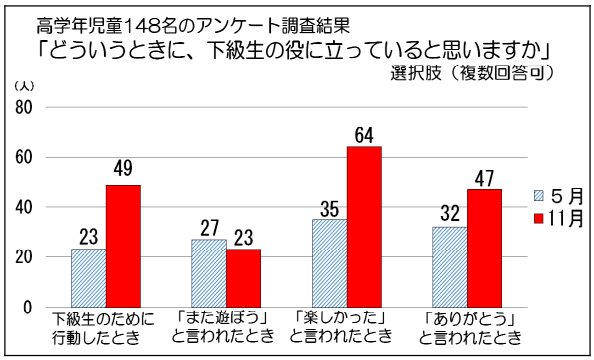

図14　児童へのアンケート調査の結果

さらに、児童の振り返りの感想では、「活動のめあてを達成できたか」という質問に対して、「達成できた・だいたい達成できた」と答えた児童が、５年生は96％、６年生は 100％だった。そして、これからのたてわり活動で、がんばりたいことについては、「もっとみんなと協力したい」「下級生の役に立ちたい」「みんなに喜んでもらいたい」という記述があった。

これらのことから、高学年児童の約８割が、異年齢交流活動を楽しいと感じ、ほぼ全員が自分の役割を成し遂げ、達成感を感じることができた。また、高学年児童は、今後のたてわり活動において、他者のために役に立ちたいという意欲を持っていることが分かった。そこで、「児童用たてわ

り活動ハンドブック」を活用した異年齢交流活動において、高学年児童一人一人が役割を持ち、下級生のために行動することや、他者からの肯定的な評価により認められることが、高学年児童の自己有用感を育むことにつながったと考える。

(3) 他者から認められる活動を導くワークシート（「Good Jobカード」及び「たてわりENJOYカード」）の活用について

高学年児童は「Good Jobカード」に、下級生のために行動することに対して、具体的な関わり方をめあてとして考え、記入し、それを意識して活動した。活動後には、下級生からメッセージを受け取り、振り返りを記入した後、仲間や保護者からの「ほめる・認める・励ます」メッセージにより、自信を持ったり、他者の役に立つことができたと感じたりし、自己有用感を育んだ。さらに、もっと仲間と協力したい、下級生の役に立ちたいという活動への意欲を持つことが分かった。

・自分ががんばったことが、いろいろな人から認められると、すごくうれしい気持ちになった。（５年）
・自分がすごくがんばれば、他の人が「楽しい。」と思ってくれることが分かった。（６年）
・班のメンバーやお母さんの感想を毎回もらえ、「がんばってね」などの言葉を見るのが、とても楽しみになった。（６年）
・班のみんなからたくさんほめてもらったので、自信が持てた。もっとがんばろうと思う。（６年）
・自分のよさを教えてもらえてうれしかった。（５年）
・みんなが自分を見てくれていると思った。（６年）
・運動会では、６年生の競技の時に下級生がみんなで応援してくれて、団結、協力、絆を感じた。（６年）
・たてわり清掃では、６年生が自分から「トイレ掃除をやる」と言って、かっこよかった。（５年）

図15　Good Jobカードに対する児童の感想

また、事前・事後学習を総合的な学習の時間に位置付け、準備や振り返りの時間を十分確保したことで、高学年児童は活動後に互いのよさを認め合い、仲間との絆や役割における達成感、自信を得ることができた。さらに、５年生においては６年生への憧れを感じることもできた(図15)。

そして、「Good Jobカード」の保護者の記述（図16）からは、このカードが異年齢交流活動の様子を家庭に伝え、我が子の下級生への関わり方や仲間とのつながりを保護者に知ってもらう手立てとしても有効であることが分かった。しかし、高学年の担任からは、毎回家庭からカードを全員分回収するには、時間がかるという感想があった。

・たてわり活動は、上級生として一年生のお世話をするよい機会だと思いました。楽しくできて、学校の友達も増えて、すごく良いことだと思います。（６年保護者）
・運動会では、６年生全員が下級生の面倒を見て、一人一人がリーダーシップを発揮していたと思います。応援で下級生の声が出ていたのも、６年生が一生懸命がんばっている姿を見せた証だと思います。とても良い運動会を見せてくれてありがとう！（６年保護者）
・全員が楽しめるようにと考えて企画して、活動できたことがとても良いと思います。低学年から高学年までのことを考えるのはなかなか難しいこともあると思いますが、すばらしい企画ができるといいですね。（６年保護者）
・カードから、とてもしっかり取り組む様子が目に浮かびます。家の外でも年下の子どもたちにきちんと接することができているようで、とてもうれしいです。（５年保護者）

図16　保護者のGood Jobカードへの記述

たてわりコーナー掲示用の「たてわりENJOYカード」は、個人の「Good Jobカード」と区別するために色紙で作成したが、教職員からは「活動ごとに色を変えるとわかりやすい」という意見を得た。また、担当教員からのメッセージは、教職員からのアドバイスにより、児童に分かりやすくするために、朱書きにした。６年生の児童からは、「たてわりENJOYカード」は、「担当の先生からほめてもらえるのでうれしい」「自信になる」という感想を得た。

このように、「Good Jobカード」や「たてわりENJOYカード」は、高学年児童にとって、自分ががんばったことを他者からほめられたり、認められたりすることで、仲間との絆や他者と関わる楽しさや喜び、自信や意欲という高学年児童の自己有用感を育む有効なワークシートになったと考える。

Ⅵ　研究のまとめ

１　成果

○　「たてわり活動ハンドブック（教師用&児童用)」の作成と活用により、高学年児童の自己有用感を育

む異年齢交流活動の工夫において、ねらいや取組方について教師の共通理解を図ることができた。また、高学年児童が主体的に活動に取り組み、活動への見通しを持つための有効な教材となった。

○　児童会による取組や輪番制によるリーダー体験、下級生のために行動するという、一人一人が活躍する場の設定は、仲間との共同的な活動による絆づくりや児童主体の異年齢交流活動を導くことができた。また、高学年児童が他者から認められたり、互いのよさを認め合ったりすることで、仲間と協力し、他者のために進んで行動するという自己有用感を育むことができた。

○　他者から認められる活動を導くワークシート（「Good Jobカード」及び「たてわりENJOYカード」）の活用は、高学年児童の活動に対する他者からの肯定的な評価により、他者と関わる楽しさや他者の役に立つ喜び、活動への自信や意欲を持つという高学年児童の自己有用感を育むことにつながった。

２　課題

○　児童主体の異年齢交流活動は、学校の実態によって多様な活動になるように計画することができる。そこで、「たてわり活動ハンドブック（教師用）」の活動内容に、今後は交流給食や遠足などの活動の流れを加筆して、内容の充実を図りたい。

○　高学年児童が下級生のために接しても、教師の支援なしでは下級生と関わることが難しいペアがあった。そこで、児童の実態に応じて班の中でペアを変え、多くの下級生と関わることで、さらに高学年児童の自己有用感を高めることができるであろうと考える。

Ⅶ　今後の異年齢交流活動における、より良い実践に向けて

１　たてわり活動ハンドブックの活用は、教師の共通理解と児童主体の異年齢交流活動を導き、全校体制による取組につながる

「たてわり活動ハンドブック（教師用&児童用）」の活用により、教師の共通理解を図り、多様な異年齢交流活動における児童主体の活動を導くことができた。これは、全教職員が異年齢交流活動のねらいや手立てを理解し、教師主導ではなく、児童主体の活動を見守り、支援する体制ができたためである。そこで、異年齢交流活動におけるたてわり活動ハンドブックの活用は、全校体制による取組につなげられると考える。

２　輪番制によるリーダー体験による共同的な活動と、互いに認め合い自己有用感を育む取組により、児童同士の絆を深めることができる

高学年児童は、輪番制によるリーダー体験により、リーダー役を勤める仲間のために協力し、互いのよさを認め合うことで自己有用感を育み、仲間との絆が深まったと考える。さらに、異年齢交流活動で下級生のために行動することにより、同学年児童同士の絆だけでなく、下級生との絆も深められた。このような児童主体の異年齢交流活動で互いに認め合うことは、児童同士の望ましい人間関係を形成し、いじめの未然防止にもつなげられると考える。

＜参考文献＞

・国立教育政策研究所　『生徒指導リーフ』シリーズ
・国立教育政策研究所　『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」―活動実施の考え方から教師用活動案まで―』(2011)
・国立教育政策研究所　『校区ではぐくむ子どもの力―いじめ・不登校を減らすヒント―』(2011)
・国立教育政策研究所　教育課程研究センター　『特別活動　指導資料　楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動　小学校編』(2015)
・栃木県総合教育センター　『高めよう！自己有用感～栃木の子どもの現状と指導の在り方～』(2013)
・滝　充　編著　『ピア・サポートではじめる学校づくり　実践導入編「予防教育的な生徒指導プログラム」の導入と実践』　金子書房（2002）

＜担当指導主事＞

小林　秀之　　野原　亮